

ニュージーランド・マオリの家族

著者	石川 榮吉
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	59
ページ	79-80
発行年	2006-02-24
URL	http://doi.org/10.15021/00001608

7 ニュージーランド・マオリの家族

ジェームズ・クック以来、ニュージーランドの先住民マオリに関する文献はおびただしい数に上っており、最近ではテ・ランギ・ヒロアやアピラナ・T・ンガタのような、この民族自身の手になる優れた業績もあらわれてきている。しかしながら、今日までのところ何といっても最も著名であり、事実それだけの内容を具えた優れたマオリ社会の研究書は、レイモンド・ファースの*Primitive Economics of the New Zealand Maori* [Firth 1929] であると称してもおそらく異論はあるまい。

あらためて述べるまでもなく、この書はマリノフスキーの薫陶を経たファースが、いわゆる機能主義の方法を駆使して、マオリ社会とその経済機構との機能連関的な構造を分析したものであり、ただマオリ社会の研究というだけでなしに、マリノフスキーらとともに、原始経済一般についての、研究の新しい道を開いたものと評価されている。しかし、私にはこのファースによるマオリ社会の分析をたどってゆく時、一つの疑義に到達せざるをえない。そしてこの疑義は、所詮、文化理解の発想法の問題に還元されるのである。ここでは、家族および氏族に限って具体的な指摘を試みよう。

マオリ社会を構成する社会集団の一般的系列は、ファナウ—ハプ—イウィ (*whanau—hapu—iwi*) である。ファナウは妻や子供をともなった数多の兄弟からなるか、老夫婦とその子孫とからなり、1~2戸の家屋に同棲する。ファースはこれを大家族または*Großfamilie*と呼んでいる。ハプはClanに当てられ、大家族を幾つか含む血縁集団であって、通常これが一個の村落を形づくる。相続は双系的であり、ファースはそれ故*ambilateral group*とも呼んでいる。イウィは同様な原理でハプを統合したもので、*tribe*に当てられる。

さて、問題は大家族であり、ファースに先立つマオリ研究者たちは、いずれもこれをもって社会経済的基礎単位となした。マオリに関する先駆的研究者として数多の貴重な著述をものし、ファースもまた依拠するところの少なくないエルズドン・ベストは、マオリ社会の共産的慣習がわれわれの知るような個別家族を生み出す条件を阻止していると述べ、これに当たるマオリ語の無いことをその有力な証左となしている。これに対してファースは、ファナウが生産と所有の重要な単位となることを否定するものではないが、夫婦間の特別な互惠関係や、子供の養育をめぐる親子間の情緒が、他の成員に対するそれと異なることを指摘し、個別家族こそマオリ社会の真の基礎単位であると反論しているのである。

個別家族を人類の普遍的な基礎事実とするこの種見解は、マリノフスキー、ロウィその他少なからぬ人類学者の採るところであるが、少なくともマオリ社会の場合、個別家族が型相化されない、社会的に認承された制度の外の存在であったことは否定されまい。われわれはベストほどのマオリ観察者をして看過せしめたという、この事実の中にこそ率直に、この社会の家族の性格を考えるべきではあるまいか。特別な互惠関係と情緒に規制された家族結合の芽は、あらゆる人類社会に存在するかも知れない。しかしそれが

社会的な制度として顕在化しているか否かは別問題であり、もしここに焦点を絞るならば、事実として存在する家族の芽が、顕在化してくる条件こそを問題とせねばなるまい。

かような視点に立つならば、私は個別社会の顕在化してくる一つの条件として、その経済的自立性の高まりを指摘したい。そしてこの事は、次に述べるファナウとイウィとの矛盾的關係から推測されてくるのである。

マオリ社会では制度として氏族外婚は必しもおこなわれず、またハブの成員権は両親を通じてえられる。それゆえ外婚のおこなわれる場合には、子供は両親それぞれのハブの土地に権益をもつこととなる。しかるに事実においては、その権益は時の経過とともに定住地（父方居住が多くおこなわれる結果、しばしば父方の村）にのみ限定されがちとなっている。かくてハブは事実上ほとんど父系氏族に異ならない。われわれはここに、共に住み生産と消費を共にするという事実が、血縁に基く系譜の事実を上廻って強く作用していることを認めようが、さらに注目すべきは、女子の結婚により、その子供を通じて他のグループが、その女子の元のファナウの土地に何等かの権益をもつことが喜ばれず、女子の結婚に際してはその両親以上に兄弟が大なる決定力をもつ事実である。

ファースはこの事実を敘するに止まっているが、私はこの場合、氏族的紐帯に由来する物質的諸権利なるものが、大家族にとって一つの桎梏と化しているものと見たい。大家族は生活の現実的な基盤として、他のグループから独立して存在し得る能力をもち、そしてその自立性を貫ぬこうとする意向を強く打出しているわけである。事実ファナウは経済的な活動の単位として、土地の所有・生産・生産物の分配をその内部で完結的におこない、経済的自立性は極めて高いのである。その上に立つハブないしイウィは、経済的には土地の上位所有権をもち、また若干の大規模な労働に際して協業をおこなうかにすぎない。観念としてではなく、具体的な諸権利の媒体としての氏族系譜は、むしろファナウの反撥に直面して解体の危機にさらされているとは見られぬであろうか。

そのファナウの中にあっても、個別家族の芽があり、しかも生産と消費を共にするファナウ経済の中においても、堀棒・斧などの生産用具は個人によって私有され、個人の労働によってえられた獲物は、一般にファナウの共有に帰せられがちとはいえ、原則的には彼個人の所有権を認められているという—かつてマリノフスキーがトロブリアンド経済の分析で否定したとき—非共産主義的な個人権の存在する事実は、やがて現在は制度外的存在である個別家族が、その経済的自立の高まりのゆえに、ファナウをさえ矛盾と感ずるにいたらぬとは断言できまい。

すでに岡田謙教授が指摘されたように、大家族は小家族への分解の契機をしばしば含んでいる。機能論的研究は、文化ないし社会の機能連関的な均衡構造の分析に終始し、スタティックな文化理解に止まる危険をはらんでいる。ダイナミックな発展の相において文化理解を試みるならば、たとえ分析の場を現在に限るとしても機能主義に呈せられる「現在学的」という評言も、あながちに「反歴史的」と同義にはならないであろう。